学 位 論 文 審 査 要 旨　公開審査日 2020 年 2 月 26 日(水)

報告番号：甲・乙　第　2172　号		氏名：　岡田　拓朗	
論文審査担当者	主査　主任教授　松村　一　㊞	副査　主任教授　近津　大地　㊞	
		副査　主任教授　土田　明彦　㊞	

審査論文

題　名：Carboplatin and docetaxel in patients with salivary gland carcinoma: a retrospective study

（　唾液腺癌に対するカルボプラチン、ドセタキセル併用療法の後方視的検討　）

著　者：Takuro Okada, Takashi Saotome, Toshitaka Nagao, Tatsuo masubuchi, Chihiro Fushimi, Takashi Matsuki, Hideaki Takahashi, Kouki Miura, Kiyoaki Tsukahara, Yuichiro Tada

掲載誌：in vivo 33: 843-853, 2019.

論文要旨：

再発転移唾液腺癌に対するカルボプラチンとドセタキセルとの併用療法を施行した 24 例に対し、有効性と安全性について、後方視的に検討した。カルボプラチンは AUC 5、ドセタキセルは 70mg/m2 で day1 に投与し 3 週毎に最大 6 コース投与した。

24 例中 18 例（75%）で 6 コースの投与が完遂できた。治療効果は CR 2 例、PR 8 例、SD 9 例（long SD 3 例）、PD 5 例で奏功率は 41.6%（10 例）であった。病理組織別に最も症例数の多かった唾液腺導管癌では、CR 2 例、PR 4 例、SD 3 例（long SD 1 例）、PD 3 例で、奏効率 50.0%（6 例）であった。全症例での progression-free survival 中央値は 8.4 か月、overall survival 中央値は 26.4 か月であった。
Grade 3/4 の有害事象として、好中球減少、貧血が約 20～30%の症例で認められたが、管理は可能であった。また、ホルモン療法が奏功しなかった症例にも効果が見られた。

以上より、再発転移唾液腺癌に対し、カルボプラチン、ドセタキセル併用療法は一定の効果があり、認容性も高く、治療選択肢の一つとなりうると考えられた。

審査過程：

・研究の背景、方法、その結果に関して、適切な説明がなされた。
・今回検討されたレジメンの再発転移唾液腺癌に対する治療の位置に関して、適切な説明がなされた。
・検討された症例数から結果・考察を導き出すうえでの、解析の可能性と限界に関して、適切な説明がなされた。

価値判定：

再発転移唾液腺癌に対する標準的な化学療法は確立していない。本研究では、シスプラチンよりも毒性が少ないとされるカルボプラチンと、過去の報告の少ないドセタキセルとの併用療法について検討した。この結果、カルボプラチン、ドセタキセル併用療法は一定の効果があり、認容性も高く、治療選択肢の一つとなりうると考えられ、臨床に寄与するものであった。よって、学位論文としての価値を認めた。

東京医科大学